

令和6年度第1回播磨科学公園都市の新たなあり方検討協議会

議事概要

- 1 日時 令和6年11月11日（月曜日）10:30～12:00
- 2 場所 兵庫県立先端科学技術支援センター 多目的室
- 3 議題
 - (1) 播磨科学公園都市の現状・課題等について
資料に基づき説明
 - (2) 今後の進め方について
資料に基づき説明

【委員意見】

(たつの市長)

- ・人口減少に伴う分譲地の停滞、組合立小中学校の未稼働校舎の問題、建築物の老朽化や地域整備事業会計の運営に不安があるため、地元住民と地元企業に丁寧に説明し、理解・協力を求める必要がある。
- ・持続可能なまち、魅力あるまちの実現に向けて、この会議で議論できることを期待している。

(上郡町長)

- ・当初の計画人口と現在の人口に差があるのが大きな課題である。当初から社会情勢が変化している。地域の課題について住民の意見を聞きながら丁寧に解決することが必要である。
- ・企業庁の財政問題について、事業を縮小することで解決できる問題もあれば、この地域がある限り続いていく問題もある。この点も考慮した持続可能なまちづくりの議論が必要である。

(佐用町長)

- ・当初から社会情勢が大きく変わっており、インターネットの普及により研究者が播磨科学公園都市に来る機会が減り、また交通の便も悪いため、住民も増えにくい。
- ・高速道路のICも整備されたことから、まちびらき30年を機に、西播磨の核となるようなまちを目指すべき。相生市や赤穂市、宍粟市、姫路市とも一緒に考えていくべき。
- ・今の気象状況を見ていると、気候問題が最優先課題である。播磨科学公園都市としても、広大な未利用地にある森林を資源と考えて、どう活かすのかを考えなければいけない。
- ・著名な建築家の建築物が播磨科学公園都市の価値をどれだけ高めているのか疑問である。老朽化が進むこれらの建築物に多額の費用をかけ続けて修理する必要があるのか考え直す時期にきている。

(委員)

- ・テクノポリス計画は全国の他地域でもうまくいっていない。播磨科学公園都市は、この計画に手を挙げなければできていなかったまちであり、企業の立地状況をみると、他地域と比較しても悪くないのではないかと。

- ・住宅地の分譲が伸び悩んでいるが、住民生活をどうしていくのかの思いについて、県と市町でずれがあるように思う。市町は医療センターの活用が核であると考えている。産学住医の連携が必要だが、「住」の部分をどうしていくのか検討することが重要である。
- ・母都市という考え方をきちんと考えていくべきである。

(委員)

- ・今のままではまちの再生は難しい。30年前から今のような議論をしておくべきだった。県がこのような会議を設けていることは、大変良いと思う。人口フレームの設定によって、まちのあり方は変わってくるため、現状分析が必要である。どの程度の規模か理解して今後ガバナンスを変えていくしかないのではないか。

(委員)

- ・地域に住んでいる人はどのように考えているのか、当事者、特にターゲットを子供や大学生に絞るなどして意見を聞くワークショップなどの場が必要である。ただワークショップを開催するのではなく、小中学校などに出向いて意見を聞いてもいいのではないか。住民向けワークショップを開催するだけでは、参加メンバーが固定され、同じ人の意見しか把握できなくなる。このようなワークショップを開催して既成事実を作るようなやりかたはやめるべきである。
- ・周辺地域の人はこの都市をどのように見ているのかの分析を行い、なぜこの都市を選ばなかったのかなどを聞いていくべき。
- ・郊外ニュータウンとしてのあり方を、公共交通の確保を含めて考えていくべき。母都市は姫路市との連続性が重要であるが、姫路市までのバスがなくなったことで住むにはさらに厳しくなったと感じる。
- ・まちの弱みだけでなく、強みを活かしたまちづくりを検討してほしい。

(委員)

- ・企業庁の会計は収支均衡が基本であり赤字は出せない中で、赤字が出てしまっており、収支均衡の原則から外れている。フローも厳しいが、ストックも厳しい状態となっている。
- ・このような中で、未来志向で考えて、明るい未来をどう描くかが重要であり、持続可能なまちを目指すべきである。
- ・県、市町、住民、企業等が自分ごととして率先してまちのあり方について考えるべきである。今回の協議会は県が主体となって実施しているが、次回以降は市町がマネジメントすべきではないか。

(委員)

- ・現状のまちの状態について危機感を持ったうえで、将来を考えるべきである。
- ・この地域を国内外に向けてもっとプロモーションすべきである。
- ・関西イノベーション国際戦略総合特区の東西軸連携における、播磨科学公園都市の役割をアピールすべきである。
- ・著名な建築家の建築物が建っていることも改めてアピールすべきである。
- ・第2・3工区については、山林のままで、企業に投資してもらおう形式での開発も検討すべきである。

- ・産業用地のあり方を考えるべきである。産業用地が全国的に足りていない中で、住宅地と産業用地の良いバランスを検討すべきである。

(委員)

- ・地方自治の観点で見たときに、当事者を増やすことが重要である。協議会を運営するにあたり、各会議を横断して、他人事にならないように関係者での情報共有が重要である。
- ・共感を得て自分ごとにしていく上でもプロモーションが重要である。そのため、現在はハード整備に力を入れているが、もっとソフト面にも力を入れるべきである。物理的な建物をPRするだけでなく、住民や来訪者がどう感じているかなどを掘り起こしたうえで、まちの物語を見せていくべきである。
- ・ここにしかないものとして、やはりSPring-8が核になる。文部科学省としては、投資した施設が、何ができる施設で、どのような価値があるのかをもっと地域に知ってもらいたいと考えている。まずはその点において、国と地域が連携を深めることができないか模索した方がよい。
- ・県庁内での部局横断体制も大切。例えばサッカー場についても、県のスポーツ行政にとってどのような位置付けで、どう利活用していく価値があるのかを示す必要がある。

(委員)

- ・新しい時代をけん引するコンセプトづくりが重要である。成熟社会において、国際目標を意識したサステナビリティな環境政策も盛り込んだまちづくりをコンセプトにすべき。人口減少の世の中にふさわしい、ひとと自然が共生するまちとして、環境基本計画が提示している「地域循環共生圏」の概念も参考になる。ダウンサイズするところと、新たに整備・活用するところを分けつつ考えていく必要がある。また、地域住民や民間の意見を聞くことや国内外の知見を参考にすることも重要である。

(委員)

- ・SPring-8は世界一を維持するため再整備を行う。ぜひ活用いただきたい。

(委員)

- ・大学としては、住んでいる人と来訪している人の中間の立場で考えている。大学生は一過性のものであり、このような流れていく人のことも含めて生活の状況を考えてもらいたい。
- ・研究面では理化学研究所と連携しており、SPring-8-IIには期待している。